



『遠い山びこ』

無着成恭と教え子たちの四十年

佐野眞一 著

高度経済成長
生活記録
東北大飢饉
経世済民
実践科学
Keyword

雪がコンコン降る。／人間は／その下で暮らしているので

「雪」と題された、この三行詩こそが戦後民主主義教育の金字塔とされた無着成恭による『山びこ学校』（二九五二）の巻頭をかざるものだ。

同書は、昭和二三（一九四八）年に山形県の山元中学校の新任教師となった無着がおこなった作文教育（生活綴方）の成果を編んだもので、四三名の生徒が書いた詩十六編とエッセイ二十七本に答辞一通が収められている。「雪」もさることながら、方言をおりませて綴られた作品のほとんどが、東北地方の生活の喜怒哀楽をかざることなく伝えていく。

佐野眞一（一九四七）による『遠い「山びこ」』（一九九二）たる書名は、いうまでもなく『山びこ学校』と無関係ではありえない。

その執筆動機は「昭和二六（一九五二）年に『山びこ学校』

をあてた『巨怪伝』（文藝春秋、一九九四）を上梓し、大衆操作の武器たるメディアの浸透と高度経済成長のかかわりを追求した。さらにはダイエー創始者の中内功を描いた『カリスマ』（日経BP社、一九九八）では、高度経済成長期からバブル経済期にかけて大衆消費社会が誕生し、爛熟していった一方で、とりかえしのつかない経済破綻をひきおこしていった過程を詳述したように、佐野は高度経済成長を素材としながら、日本社会の「いま」を問いつづけている。

高度経済成長期は昭和三〇（一九五五）年代半ばから昭和四八（一九七三）年のオイルショックまでをさす。昭和四二（一九六七）年うまれのわたしには、高度経済成長の実感も記憶もない。むしろ、物心がついた頃には、オイルショックに端を発した狂乱物価に翻弄される時代であったからである。

たとえば、幼少期を回想する際、わたしは不思議とつぎのCMを思い出す。ホタテ貝状の大きな二枚貝のぬいぐるみを着た人物が、その二枚貝のなかに商品を決めこみ、貝をバタバタさせながら「貝閉め」と大騒ぎしているものだ。思えば、「貝」と「買ひ」、「閉め」と「占め」をかけた、品不足をネタにしたお笑いだったのであろう。ぬいぐるみが白かった印象はあるものの、それが白黒テレビだったためかどうかは定かではない。しかし、両親はカラーテレビだとの主張をまげようとしない。なぜならば、わたしが誕

を巣立った卒業生たちの「その後」を追うことで、どんな戦後史の本にも書かれていない庶民のありのままの戦後史を叙述する」ことにあつた「佐野二〇〇一、一四三頁」。

本稿では、『遠い「山びこ」』に依拠しながら、他者の経験・記憶をいかに共有しようのか、について生活記録の重要性とからめて考えてみたい。

高度経済成長を実感するということ 『遠い「山びこ」』を、みずからの向かうべきテーマを定めた作品と位置づける佐野は、日本の高度経済成長とは「農村から労働人口を吸収し、教育を画一化することによって企業戦士の育成をはかる」ことであつたと喝破する「二〇〇一、一四二頁」。事実、この仮説の延長線上に佐野は、次々と労作を発表していくのである。

たとえば、同書刊行後わずか二年にして、読売新聞の土台を築きあげただけでなく民放テレビの始祖でもあり、かつ日本プロ野球の生みの親とも称される正力松太郎に焦点

生した際にカラーテレビを奮発したから、というのである。

わたしにとつて高度経済成長による物質的な豊かさは、自明なことである。とはいえ、急成長の反動として公害問題が多発したことも知っている。そのような一般的な了解をこえ、自分の感覚として当時の社会状況を理解するにはどうしたらよいか。まさに異文化理解の課題でもあるが、人びとのかたる経験談に耳をかたむけ、その内容を自分に関係する事柄にひきつけながら理解していくことは、方法的に有効なはずである。

たとえば、『山びこ学校』の時代、山元村にかぎらず、日本全体がまずしかつたことは周知のことである。だが、その貧困はいかほどのものであつたのか。『遠い「山びこ」』の随所に散見する記述から、一例を紹介しよう。

映画撮影のために村にやってきたスタッフには、「山元村の子どもたちが学校の正門横にたつ二宮金次郎像をみて、『あればつかりのタキギを背負ったんじゃ、いくらでも本が読めらあ』と笑』っていたことが印象深かつた「二四九頁」。

北海道での調査中、廃校を改装した宿舍の裏庭で偶然、金次郎像をみたことがある。風化しつつある姿がいたましく感じられたが、それよりも足元にそえられていた「至誠報徳」という四字熟語がはつきりと読みとれたことに違和感をもった。端正なみなの金次郎は腰から背中にかけて、両端のそろつた薪をバックバックの要領でこんもりと背負

い、電車内で読書するように視線を本に向け、うつむきながらスマートフォンに立っていた。

山元村の子どもたちは中学一年くらいから、大人と同等の荷物を背負って一里もある山道をのぼりおりするくらいだから「七四頁」、いくら「私利私欲にはしらずに社会に貢献すれば、いずれはみずから還元される」と金次郎が説いた「報徳」を強調したところで、子どもたちには冗談にしか聞こえなかったにちがいない。

わたしは豊かさを享受できる今日の生活をありがたいと思っているし、後の世代にはさらに暮らしやすい社会を継承したいと願っている。だが、このような「いま」を築いた世代の暮らしぶりも同時に伝承するべきだと考えている。そのためにも、無着が「生活綴方」で実践したことは、あらためて再評価されてしかるべきであろうし、生活綴方をうたわずとも生活経験を記録した文章の掘りおこしが不可欠なものとなる。

生活記録へのこだわり 敗戦からわずか十一年目の昭和三一（一九五六）年の『経済白書』が「もはや戦後ではない」とうたった頃、佐野が私淑する民俗学者の宮本常一は、まつりや伝承といった民俗的事象の採集と整理・分析をもつて民俗誌とするのではなく、民俗学は「人びとが日々いかなる生活をもつとつばさに見るべきであり、民俗誌ではなく、生活誌の方がもつと大事にとりあげられるべき

道筋を決定づけたのであった。

こうして政策化された人口移動の主役となったのは農家の次男以下の子どもであった。そのおおくが都市部の工場などで就労するために中卒で旅立っていった。これらの人びとは、国家の背骨たる製造業をささえていく人材の卵として、「金の卵」ともてはやされた。かれらが出征兵士きながらに華ばなしく国鉄のホームから離郷するシーンを、わたしたちは古くさい映像の記憶として共有しているはずである。

しかし、この「金の卵」も、高度経済成長という時代の産物であったことにはいまさらながら気づかされる。『山びこ学校』の卒業生たちが山元村を去ったのは、これよりわずか十年ばかり前のことであり、この段階では、まだ集団就職というこぼもなかったし、中卒者を「金の卵」といつて厚遇する環境も存在していなかった。かれらは「自分の親兄弟がたどってきた道筋と同様に身売り同然の口べらし要因として村から逃散し、わが身を過酷な労働現場に率先して投じていった」のであった（三〇七頁）。

日本民俗学の父・柳田国男が、農政学を専攻する高級官僚であったことは有名である。そんなかれを農村の窮乏へすくうべき、経世済民のための実践科学としての民俗学へと向かわせたのは、『山びこ学校』の子どもたちが胚胎されていた昭和九年の東北大飢饉であったらしい。因縁めい

だ」と主張していた「網野一九八四、三二二頁」。ここでの生活誌は、無着が指導した生活綴方にひとしいものだ。それは、長期の時間軸で「いま」を見つめ、将来を展望する作業にほかならない。

『遠い「山びこ」』も、むろん『山びこ学校』卒業生たちの個人史の記録にとどまっではない。生徒たちの親世代の生活から筆をおこし、今日、とうに還暦をむかえたかれらの子や孫の世代、つまり現代社会までを射程におさめた、三世代にわたる個人史・家族史を束ねた歴史として提示されている。たとえば、第五章「翻弄される山村」は、かれらが誕生したときの村を世界史への定位に成功している。昭和四（一九二九）年に米国で生じた世界恐慌によって暴落した生糸価格の低迷により、村最大の収入源であった養蚕が壊滅したところを、昭和九（一九三四）年に今度は東北地方を「松の皮をもちにして食べた」というほどの冷害凶作がおそったのであった。その二重の打撃にみまわれた年に母のおなかに宿されていた生命が、のちに『山びこ学校』の主人公となる生徒たちなのであった。

高度経済成長を牽引したのは、昭和三五（一九六〇）に池田内閣がうちだした国民所得倍増計画と、翌年に成立した農業基本法である。同法は、農業を機械化することで余剰労働力を工業部門にまわすこと、つまり農村から都市部への大量の人口移動を誘発し、その後の農村の過疎化へしているが、生活綴方をとおして「なぜ？」という問いを発することを子どもに説いてやまなかつた無着も、柳田同様、「学問こそが世の中をよくする」ことを信じてうたがわず、その実践をこころみたと理解できる。

さまざまな格差が社会問題となっている今日、「知は力なり」とうったえても空々しいだけだ。だが、現在を生きているわたしたち自身の生活をみつめ、それを記録していくと同時にこれまでに蓄積されてきた生活経験をふりかえる作業を往還しながら、他者への想像力と包容力をきたえていくことが、いまの社会に肝要なのではあるまいか。山元中学校の生徒たちを震源とする「山びこ」は、いまもお、あらたな響きをもつてこだましている。（赤嶺 淳）

■参考文献

- 佐野眞一『私の体験的ノンフィクション術』集英社（集英社新書）、二〇〇一年
- 無着成恭編『山びこ学校』岩波書店（岩波文庫）、一九九五年
- 網野善彦「解説」宮本常一『忘れられた日本人』岩波書店（岩波文庫）、三二一―三三四頁、一九八四年